

エンドオブライフ・ケア  
～最期まで住み慣れた場所でその人らしく過ごす～

独立行政法人国立病院機構 東京病院  
緩和ケア認定看護師 村山 朋美

私は、第 36 回ハンセン病コメディカル学術集会が開催される東村山市に隣接する国立病院機構東京病院で緩和ケアチームに所属し、緩和ケア活動を行っています。

WHO による緩和ケアの定義(2002 年)では、『緩和ケアとは、生命を脅かす病に関連する問題に直面している患者とその家族の QOL を、痛みやその他の身体的・心理社会的・スピリチュアルな問題を早期に見出し的確に評価を行い対応することで、苦痛を予防し和らげることを通して向上させるアプローチである。』とされています。緩和ケアというとがんを抱えた終末期の患者さんへのケアと思われがちですが、がんに限らず非がんの患者さんも対象です。緩和ケアは、疾患・病期を問わず、病を抱え生活を送る患者さんやご家族に対し早期から継続して関わり、終末期（エンドオブライフ期）、死別後（グリーフ）まで続くケアです。

今回、テーマとした『エンドオブライフ・ケア』は、人生を完成させる時期に於いて、人生の最期までその人がより良く尊厳を持って生きることを支える包括的なケアとされています。全国のハンセン病施設で過ごされている入所者の平均年齢は 88.2 歳と伺っております。つまり、そこで生活される入所者の多くが、エンドオブライフ期にあると言えます。厚生労働省の『人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン』では、人生の最終段階における医療・ケアについては、本人のこれまでの人生観や価値観等をできる限り把握し、繰り返し話し合い、家族や医療従事者等で共有する（ACP）ことの重要性が強調されています。エンドオブライフ・ケアは、死を迎えるためのケアではなく最期までその人らしく生きるためのケアであり、多職種で協働することが重要と考えます。故郷を離れ長い間、その土地（施設＝自宅）で様々な感情を持ちながら生活をされてこられた方々に関わるコメディカルは、時に家族等としての存在となることもあると思います。住み慣れた環境で使い慣れたものたちに囲まれ、入所者の方々をサポートしているコメディカルとの関係性やたくさんの思い出に浸りながら過ごす時間は、病気や苦痛、死の恐怖さえも生活の一部に変えてしまう力を持つと言われていています。長く施設での生活をされてきた方々にとっての家そして家族について考えながら多職種で支えること、そして、エンドオブライフ・ケアを行う私たち医療者のケアについても考えていきたいと思っています。

## 略 歴

1991年 国立療養所東京病院 勤務

2004年 国立病院機構 東京病院 副看護師長

2009年 緩和ケア認定看護師 取得

現在に至る